



岡雨印の「べにばな」

先頃「紅花の守人(もりびと)」という山形県出身の佐藤広一監督による映画が公開され私もさっそく鑑賞しました。県の花でもある紅花は、染物の原料となり北前船で京都に運ばれた歴史があったこと位のイメージしか持ち合わせていませんでした。ましてや紅花の大産地でもあった中山町に住みながら、生の紅花を摘んだことさえなかったのですが、一昨年中山町の旧柏倉九左衛門家(国の重要文化財・以下九左衛門家)を維持・管理する NPO 法人黒塚の里山保存会に関わることになり始めて、紅花栽培の歴史や現状を知ることとなりました。



紅花の原産地はアフリカ・中近東など諸説ありますが、山形県で栽培されている「最上紅花」は中近東の系統だそうで、日本へはシルクロードを経由して紀元3世紀に伝来し、村山地方での栽培が確認できるのは、室町時代末期と言われています。

そして、江戸時代後期には主に村山地方で栽培される最上紅花は、全国の紅花生産量の半分を占める一大産地となったと言われています。山形県の紅花が日本遺産・農業遺産に認定されているのは「花を育て花を摘み、紅餅を作り紅花染めをする」と他の地域にはない文化・伝統のスタイルが継承されているからです。

我が中山町の地主の九左衛門家の紅花づくりは山形藩の大庄屋として、自作もし自家栽培による九左衛門家の紅花(花卉)の年間の最多は、天保8年(1837)の100貫824匁(約378kg)との記録が残されています。山形大学の岩田浩太郎教授の調査により、同家が地主でありながら、自作も広く展開し紅花生産をしていたこと、しかも生花生産では県内最大級の生産者だったことが明らかになっています。

明治9年(1876)九左衛門家の紅花の栽培は終わりましたが、平成25年、同家16代により紅花栽培が137年ぶりに復活し、毎年長屋門前は黄色い花でうずまります。

九左衛門家の紅花の銘柄は「岡雨印(おかあめじるし)」といい、「岡」岡村の地名、「雨」は花摘みの前にパラッと雨が降ると花卉に色素が乗り、品質が良くなることで高品質とされ高価格で取引されていたということもわかりました。

さて、映画「紅花の守人」を鑑賞したメンバーでこの度、黒塚の里山保存会が開催する「紅花染め」の体験に参加いたしました。紅花には1%の赤(カルタミン・紅花にしか存在しない)と99%の黄色(サフロールイエロー)の色素があります。「赤」は命を象徴する色と言われ古来より魔除けの意味で用いられました。「米の百倍・金の十倍」と謳われた紅花の貴重な赤は、その昔身分の高い方の衣装を染めたということです。その為か染めの作業中、私は何とも言いえない癒しの中で過ごしていました。

紅花にはいろいろな薬効果(血行促進など)があることは知られているので、出来上がった紅花染めのストールをしばらくは身につけてみたいと思っています。

